

カネボウ洲本工場跡（洲本市塩屋一丁目）

新都心ゾーン整備地区「レンガ造り建物群を新都心整備の中核に」

1. 洲本への進出

カネボウ洲本工場が洲本に進出したのは、明治33年1月のことである。当時のカネボウは関東地方を中心に経営活動をしてきたが、中国・東南アジア・インドという、原綿産地・商品市場を視野にいた経営戦略のため、明治27年兵庫工場設立を皮切りに関西地方に経営の重点を移し、洲本工場もその一翼を担った。明治40年、洲本川の河川改修により生じた広大な土地にカネボウ新工場を誘致しようとする活動がおこった。当時カネボウは大阪で新工場の建設計画を進めていたが、洲本の土地が広大であることや輸送機能があることなどから、洲本に新工場が建設されることとなった。そして明治42年、カネボウ洲本第二工場の操業が始まった。

2. 発展と拡大

明治42年の新工場建設に始まり、大正5年に第三工場、大正6年に第4工場、昭和9年には第5工場と昭和10年代前半の約30年間は次々と工場の増築や機械設備を増設するなど発展・事業拡大の一途をたどり、生産設備の全盛期を迎えた。

第二次世界大戦により綿業全体が生産を縮小せざる得なくなり、洲本工場においても操業の大幅圧縮を余儀なくされたが、都市部にあった大阪工場や兵庫工場などは戦災により致命的な打撃を受けている中、幸い洲本工場は紡績工場としての原型をとどめていたため、設備の復元と強化が施され、戦後復興を果たし昭和26年には4,200人を数える従業員を擁し、カネボウ綿業部門のトップ工場として順調に発展した。また、一方では工場の環境改善、寄宿舍の改築、柳学園定時制高校、保育専門学校の併設など従業員の厚生施策にも力を注いだ。

3. 事業転換

戦後も順調に業績を伸ばしてきたが、昭和30年以降、その企業活動にもかげりが見え始め、次々と工場が閉鎖され、昭和60年には繊維部門が全面閉鎖されることとなった。これに代わり、工場の施設や敷地を全く新しい観点で利用することが決まり、工場地区の一部が電子部品製造工場とショッピングセンターに転換されたが、広大な企業用地の多くは放置される状況が続いた。そして平成6年、これらの遊休地の活用と旧洲本港埋立地を含め、洲本市とカネボウとの共同で開発整備を進めることとなり、明治に建設された歴史と味わいのある赤レンガづくりの重厚な施設の一部が観光や文化の拠点施設として整備されることになった。

4. 活用に向けた取組

カネボウ洲本工場の一角にあるレンガ造建物は、明治から大正にかけて淡路島の産業革命の象徴というべき建造物である。カネボウの事業転換により広大な企業用地とその建物群は放置される状況が続いた。

平成5年、これらの遊休地の活用についてカネボウとの話し合いがもたれ、この遊休地と旧洲本港埋立地を含め、カネボウと共同で開発整備が進められることとなり、平成6年に新都心ゾーン整備構想としてスタートした。この構想では「淡路島のすぐれた資源を生かして、さまざまな交流を促し、人やものが出会い、新しい価値が生まれるようなまちづくり」が基本理念として掲げられた。遊休化していたこの土地に手がつけられることが決まると「レンガ造り建物を残せないか」という希望が多くの人から寄せられ、また学識経験者からも「歴史の財産として保存しては」という提案がなされた。これらを受けて、シンボリックなレンガ造建物は取り壊さずに保存していくこととなった。

レンガ造建物の再生の第一弾として、原綿倉庫を美術館に、製品倉庫をレストランに改造する計画が進められ、「ミュージアムパークアルファビア」と「ミュージアムレストラン」として開業された。第二段は、もとのエネルギープラントを再生させて、第一次産業の振興に役立てる施設整備を計画し、レストランと直販施設として「御食国」（みけつくに）として開業された。第三弾は、レンガ造りの塀をうまく取り込んだ形で「市立図書館」が建設された。図書館建設にあわせて、レンガ造り建物に囲まれた広場は「市民広場」として整備された。最後に、製造販売一体型の施設として経済産業省の外郭団体により「洲本アルチザンスクウェア」が整備されました。

このように、旧カネボウ洲本工場のレンガ造り建築物は、明治42年から大正6年の間に建設され、この間、昭和21年の南海地震や平成7年の阪神・淡路大震災といった未曾有の大災害にも耐え抜いた建物5棟が、今は「御食国」「図書館」「レストラン」「洲本アルチザンスクウェア」「(旧)アルファビア美術館」施設として再利用されている。これらの施設は、今の技術をもってしても、又現在の建築基準法令の規定からしても、もはや再生が困難な、国内でも数少ない施設であり、歴史的観点から推察しても日本の産業革命が残した「宝物」であり、また本市においても市民生活とともに歩んできた「宝物」となっている。

現在は、美術館は閉鎖されたが、周辺に整備された公共施設「洲本市健康福祉館」「洲本市文化体育館」もこれら旧カネボウ洲本工場の重厚な赤レンガ造りの景観を調和するような配慮された建物になっている。これらの施設は本市の新しいスポット施設としてもにぎわいをみせている。